

## 「目を覚まして祈っていなさい」

2023年11月09日

「よく言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない。」（ルカ21：32～33）

「その日は、地の面のあらゆる所に住む人々すべてに、襲いかかるからである。しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」（ルカ21：35～36）

主イエスは、人の子（メシア）が力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見たら、身を起こし、頭を上げなさい、救いが近づいているからであると、終末が到来した時の状況を黙示的に語られた。そして、この時に備えて、目を覚まして祈っていなさいと続けられた。

主イエスは、いちじくの木や、他の全ての木から葉が出始めるのを見ると、夏の近いことが分かるように、天の諸力が揺り動かされ、地がどよめき狂うようなことが起こるのを見たら、神の国は近いと悟りなさいと譬えられた。神の国は主イエスの働きによって既に始まっているが、終末の時には、神の国の全体性が明らかになる。そして「よく言うておく」と注意を喚起され、終末時まではこの時代は滅びることはないが、「天地が滅びても、私の言葉は決して滅びない」と力を込めて語られた。代々のキリスト者は、主イエスの言葉は決して滅びないという言葉信じて、苦難に打ち勝つ信仰を全うした人々は限りなく多い。これらの言葉は、著者ルカの主イエスに対する堅い信頼の言葉であり、終末時の確かな救いを告げるルカの信仰告白である。

これを踏まえ、「目を覚まして祈っていなさい」に繋げていく。まず、二日酔いや泥酔や生活の煩いで、心が鈍くならないようにと注意を促している。その日が、地上のあらゆる所に住む人々に、罌のように突如襲いかかるからである。しかし、主イエスを信じ従おうとするあなたがたは、起ころうとする最後の裁きから逃れて、人の子（メシア）の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。全き救いに与る世の終わりの日に備えて、目を覚まして祈っている。これは、どのような信仰であろうか。

私たちは主イエスを信じて、今、永遠の神と繋がっている。時間の中で、究極なことと関わる終末を「既に」体験している。しかしそれは、終末の日に与えられる全き究極を「未だ」体験してなく、迷いや不信に晒されている。終末の日に、「未だ」が取り払われ、神と直接相まみえる完全な救いが得られる。私たちは「既に」と「未だ」の中間時を生きているが、「未だ」が抹消された究極と結びつく終わりの日の到来を待ち望む。その待ち望みの信仰を「目を覚まして祈っている」と言うのである。この信仰は非論理的で、愚かと言われるかも知れないが、究極的終末を待望して目を覚まして祈っていることが、困難と不条理に満ちた今を平安と希望を持って生きる源泉である。

聖書の最後のヨハネ黙示録は「これらのことを証しする方（主イエス）が言われる。『然り、私はすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来りませ。（黙示録22：20）」で終わっている。主イエスの再臨を目覚めて待つ信仰が自立的、責任的な生き方を可能にする。終末信仰のないキリスト教はあり得ない。

主イエスは、日中は神殿の境内で教え、夜は出て行かれ、「オリーブ畑」と呼ばれる山で過ごされた。民衆は皆、話を聞こうとして、境内にいる主イエスのもとに、朝早くから集まって来た。主イエスを亡き者にしたい神殿当局は、民衆の主イエスへの支持と賛意を恐れ、齒ぎしりしながらも、手出しできないでいた。